九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

高校生のロールシャッハ反応の特徴に関する研究

寺崎, 文香
九州大学大学院人間環境学府

https://doi.org/10.15017/15725

出版情報：九州大学心理学研究. 9, pp.179-185, 2008-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2008, Vol.9, 179-185

高校生のロールシャッハ反応の特徴に関する研究

寺崎　文香　九州大学大学院人間環境学府

A Study of characteristics in Rorschach of high-school students

Fumika Terasaki (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of this study was to investigate the characteristics of the Rorschach response of high-school students. Sixty-five high-school students (27 males : 38 females) were administered the Rorschach. The following 3 points were clarified. 1) The average score of F%, Ⅷ Ⅸ Ⅹ/R%, ΣC, Human% were close to the expected score of normal adults. 2) The high-school students gave lower scores in Total Response, formal level, M. This suggested the possibility to vary the score of Rorschach response in the high-school students, in the process of maturity. 3) The high-school students have a tendency of restraint in expressing their emotion, in saying excess verbalization. This showed that high-school students tend not to express themselves, to avoid affective stimulus, but rather to be passive in human relations. Furthermore, their internal control may be immature and they can't verbalize their emotions in this age.

Keywords: high-school student, Rorschach method, quantitative analysis

Ⅰ．問題と目的

青年期は様々な変化の過渡期であり，その変化に全てのひとは相対し，社会や環境に適応していかなければならない（斉藤，1996.，鈴木・松平，1987）。多くの青年は，不安定な状態を過ごし，時には危機的な状況に追い込まれながらも，なんとか成熟の道を辿り大人になっていくものである。心理臨床の現場において，青年期という発達段階では様々な形で心理的不適応が現出することが認められる。しかしこの時期においてその障害が一時的なものであるのかそうでないのかを見極めることは‘至難の業’（Winnicott，1965）であり，ひとつの援助や治療の方向性を見極めることも難しい。心理臨床におけるアセスメントでは，特に青年期を対象とする場合，発達的な視点は不可欠である。しかし特によく用いられるロールシャッハ法において，現在は思春期～青年期の被検者について成人の基準値をベースに解釈されることが多く，その発達的な特徴や成人との差異について取り上げられることは少ない。青年期のよりよい理解のために青年期のロールシャッハ法について発達的な変化の視点を含めて検討することは必要なことである。

本邦におけるロールシャッハ法の発達研究は，辻（1958），小沢（1970），松本（2003）のものに代表される。Amesら（1971）をはじめ国外での発達研究によって指摘されてきたように，様々なロールシャッハ変数が成長とともに変化することが明らかにされてきた。特に松本（2003）は小学生から中学生までの非臨床群における縦断研究の中でその反応の変遷を明らかにすると同時に，先行研究と比較して，現代の児童・思春期の特徴について言及した。

一方，青年期の非臨床群を対象としたロールシャッハ研究は散見するのみである。その中では星野ら（1995）のものが挙げられるが，星野らは一般大学生のロールシャッハ反応について，特に思考言語カテゴリーの視点から検討し，大学生の被検者に於いては「外界への関心や知性化に基づく過度な反応の明細化が特徴」であることを述べている。また，寺崎・高橋（2002）では，一般の大学生のロールシャッハ反応が極度に逸脱した様相を示さなかったという意味で臨床群とは異なる一方，形態水準の低さや思考言語カテゴリーに於いて多岐にわたる下位カテゴリーがスコアされたことを述べた。このことからは，大学生活や社会生活に適応している被検者にも，青年期の不安定さや混沌とした様子があらわれていたことが明らかにされた。

他方一般高校生のロールシャッハ反応について述べたものは特に少なく，本邦では梶塚・菅原（1985，1991）の報告に見られる程度である。梶塚らによれば，高校生では「高いW%，低いD%，及びm, C'の高得点とFcの低得点，低形態水準の傾向」が見出されたとされる。また，ややRが少ない傾向やF%の高さからは，高校生の抑制的傾向が示唆されると述べられている。また，寺崎（2004）では高校生非臨床群25名を対象にロールシャッハ法を実施したところ，高校生において成人の基準値にかなり近い値を示す変数と，達しない変数がある点では

梶塚らの結果を裏付ける部分が多かった。本研究では被検者の数を増やし，更なる検討を加えることとする。特に，高校生のロールシャッハ反応について量的分析を中心に先行研究との比較を元に発達的な視点から検討する。さらに，名大式技法における思考言語カテゴリーにも注目することで質的な側面にも注目し，その特徴を明らかにすることを目的とする。

II．方　法

1．実施時期：2003年7月～8月及び2006年7月～12月

2．対象：高校生65名（男子：27名，女子：38名。年齢：16～18歳，平均：17.2歳）

3．手続き：4つの高校（公立2校，私立2校）において被検者を募り，そこで協力に同意が得られた計65名に対して個別にロールシャッハ法を施行した。実施は各高校の担当教員およびスクールカウンセラーとの十分な協議の上で行い，希望者にはフィードバック面接を行った。その際にも被検者の健康状態などについて確認し，倫理性，安全性に配慮した。スコアリング及び解釈は，名大式技法に準じた。

III．結果と考察

高校生65名における，形式分析における主要変数の平均値を Table 1 に示す。

1．量的分析

1）反応数

本研究における高校生の反応数は7から72，平均は23.0であった。正常成人においては20～45の範囲に大部分が含まれるとされており（片口，1981，池田，1995），高橋ら（1981）の報告では正常成人の平均は31.7である。本研究の結果はやや少ない数と言え，中でも30以上の反応を産出した被検者は11名のみであった。松本（2003）によると，小学生の反応に於いては辻（1958）の平均25個という報告に比べ，松本（2003）の資料では18個と減少しており，これが現代の児童の傾向であるという。本研究の被検者において健常な成人の平均とされる数に比べると少ないという結果は，梶塚ら（1991）の高校生被検者において反応数がやや少ない（平均24.1，標準偏差10.16）という結果を支持するものである。松本（2003）の述べているように，生産性への意欲の低下や課題へ取り組む態度の消極性といった，現代の児童の特徴が高校生にも反映されているのかもしれない。

2）反応時間

初発反応時間は通常30秒以内と言われ，高橋ら（1981）の報告では全体の平均が18.0秒，無彩色カードの平均が15.7秒，彩色カードの平均が20.2秒を示している。本研究での高校生の初発反応時間はほぼこれらの基準に一致していることが示された。初発反応時間は，成人に於いては被検者が新しい場面を対処する能力，すなわちショックや葛藤を処理する能力を表すものであり，小沢（1970）によると中学生以降では時間の要因はほぼ成人と同様の意味を持つ。松本（2003）の資料では中学生の初発反応時間の平均は過去の中学生に比べかなり早くなっていると述べられており，松本（2003）は現代の

Table 1
高校生65名の主要スコア平均値及び標準偏差

	average	SD	range
T.R	23.03	11.34	7 － 72
T/ach	16.13	18.73	3.6 － 143.4
T/c	19.55	20.79	4.8 － 155
Ave	17.80	19.38	4.2 － 149.4
F%	45.94	15.53	7.7 － 85.7
F+%	61.77	16.23	23.1 － 100
R+%	60.59	12.24	28.6 － 85.7
Σ F%	92.40	7.30	69.2 － 100
Σ F+%	66.13	12.81	31.6 － 100
ⅧⅨⅩ%	33.42	9.12	0 － 52.2
Σ C	2.480	1.80	0 － 7
＜Location＞			
W%	44.72	22.97	0 － 100
D%	37.64	17.68	0 － 68.8
d%	1.15	3.30	0 － 19.2
Dd%	16.04	10.35	0 － 37.5
S%	11.81	8.47	0 － 50
A%	52.52	14.97	20 － 92.8
H%	21.11	11.45	0 － 50.0
P	3.14	1.51	0 － 6
＜Affect＞			
H%	21.26	14.73	0 － 66.7
A%	18.41	12.36	0 － 62.5
B%	3.04	5.67	0 － 22.2
TotalUn.	41.75	20.19	0 － 100
D%	14.52	10.75	0 － 50.0
P%	19.17	15.88	0 － 80.0
M%	4.27	5.94	0 － 26.7
N%	51.02	17.18	7.7 － 88.2

子どもの「物事を熟考するというよりは衝動的に反応する傾向」について言及している。本研究における高校生では，平均は10秒代であり，小・中学生に見られた現代の傾向が反映されているとも考えられるが，あるいは高校生の年代で成人に近い機敏な知的処理の能力が身に付くことを示しているのかもしれない。

3）反応領域

この値も，通常平均といわれる値にほぼ一致するが，Dd 領域の割合が高いことが特徴的と言える。いくつかの研究によって５～６歳頃に Dd が多く生じるという報告がなされており，また，片口（1987）によると Dd%は６～７歳頃から増加し，10歳以降に減少するという。しかし成人の反応領域ではあまり統一した見解が得られておらず，Ames（1952）らの15.4%という値を除いては，おおむね低い Dd%が目安となっている。片口の資料では成人の Dd%の資料では8.6%（片口），3.5%（高橋ら，1981），４～５%（名古屋ロールシャッハ研究会，1999）とされおり，また松本（2003）の資料では幼稚園児から中学生まで１～３%程度を示していた。Dd 領域の多さは常識的な思考の枠組みにとらわれない，ともすれば独断的で恣意的な思考態度を示すものであるとされ，完全癖や不安などと解されることもある。高校生における Dd%の高さは，20%以上と高い被検者に関しては，確かに独断的・恣意的にブロットを分割する様子が見られた。また全体的には，見えた部分を「ここだけ」と示すなど，W や D といった明確なまとまりに統合したり分割したりすることができない場合が多いようであった。

4）形態水準

本研究では，名古屋大学式技法に準じ，＋と－の二段階評定でスコアリングを行った。池田（1995）によると，通常は F＋%＝80～90%の範囲内であり，本研究における高校生65名の平均値は F＋%＝61.77%，R＋%＝60.59%と成人の平均に比べかなり低いと言える。寺崎・高橋（2003）における大学生健常群でも低形態水準傾向を示しており，情緒刺激によって現実を冷静に正しく見る力が低下する傾向と，反応についての説明が修飾過多になるためブロットから離れていくことから現実検討の低下に繋がる様子に触れた。一方本研究の高校生の形態水準の低さは，知覚が奇妙であったり特異であったりすることよりは，説明の曖昧さによるところが大きい。質疑段階において，「どこというのは特にありません」「ぱっとみて」といった答えが多く，知覚の曖昧さに加えて見えたものを言語化する能力の未熟さが窺われる被検者が多かった。これは高校生，大学生それぞれの年代の特徴と考えられると同時に，高校生においては，教師を介しての協力者の募集，高校内の一室における実施など検査状況の影響も考慮する必要があるかもしれない。

5）F％

池田（1995）によれば，F％は通常40～60%の範囲内とされ，高橋（1981）の資料では成人の平均は44.6%（SD：14.0）が示されている。また，片口（1987）の資料では成人の平均は43.8%で，25～55%程度が通常範囲だろうとされている。F%は最も低い年齢に於いて最も高く，年齢と共に減少し，一方 F＋%は年齢と共に上昇する。松本（2003）によれば，幼稚園の年齢で F％は60～70%，中学生の年齢で55～60%とされているが，現在の幼稚園児～中学生では高い F％が特徴的で，中学生の時点で平均値が60.65%であったという。しかしながら本研究の高校生では成人の平均値程度であった。ここから，高校生の年代で，ブロットの持つ多面的な性質を統合したり，内面を投影していったりする力が備わってくると考えられる。

6）ⅧⅨⅩ/R%，ΣC

まずⅧⅨⅩ/R%に注目する。高校生65名の平均は33.42%（SD：11.34）であり，本研究の被検者における平均値も目安とされる30～40%（池田，1995）の範囲内にある。松本（2003）の資料においても，発達的にこの値が大きく変化することはないことが示されており，幼稚園児から中学生に於いても29～35%の範囲内であった。また，色彩反応全体の出現にも注目する。松本（2003）は，幼稚園児から中学生までにΣC の数は増えているものの，現代の小・中学生は色彩反応自体が過去と比較して非常に少ない点に触れている。このことから松本は，現代の子どもが課題に対して感情を交えることなく，単純に対処しようとする姿勢が窺えると考察している。松本の資料で中学生のΣC の平均値は1.64であり，それと比較すると本研究での高校生は2.48（SD：1.8）とやや多く，高橋（1981）の資料（平均：2.9, SD：1.9）と比較しても低い値ではない。この２つの変数から，本研究の高校生において，環境からの情緒刺激に対する適度な反応性を有しているという側面が窺える。

7）M 反応と FM 反応

内的な欲求・情動の統制力について，M 反応と FM 反応に注目する。多くの研究によって M>FM は被検者の成熟性を表しているとされている。そもそも Rorschach（1921）は運動反応を，内的創造性の能力の指標と見なした。さらに Schachtel（1966）は，人間運動反応とは共感的投影の一つのタイプであると述べており，M を産出するためには創造的な体験の蓄積や内的な安定性が必要であるとされる。そのため，発達的には M は最も遅くに出現する決定因であるが，人間の発達のポジティブな側面を多く反映し，解釈上もっとも重要な指標の一つである。高橋ら（1981）は，MとFMの比率に関するいくつかの先行研究の中から，特に Levitt & Truumaa（1972）の資料を詳細に引用している。それによると，幼児が M<FM であるのが12歳頃になると M

とFMの数がほぼ等しくなり，普通知能の被検者では16歳でM≒FM，良知能の被検者では15歳でM>FMになるという。日本での正常成人の多くは，高橋ら（1981）によるとM≒FMか，Mが多少FMよりも多い程度であるとされる。本研究の高校生においては，M>FMを示す被検者は21名であり，M=FMを示す被検者は16名，FM>Mの被検者は28名であった。池田（1995）によると，通常M反応が0～1の被検者は問題であるとされるが，本研究の65名の中でM反応が0，もしくは1個の被検者は24名（0個：12名，1個：12名）であり，通常成人に産出されると考えられている数よりは少ない。またM>FMを示す被検者が成人に期待される割合に比べかなり少ないことから，内的な情動の統制の悪さ，つまり即時的な欲求の充足を延期させる力が未成熟であることが示唆された。

松本（2003）の資料によると，Mが出現する人数にはっきり増加がみられるのは中学生の段階であるとされており，中学生ではMが見られない被検者も40%近くを占めている。一方FMは中学生にも80%に近い被検者が産出しており，中学生の時点では多くの被検者のおいてFM優位であるようだ。本研究の高校生においては，中学生の資料に比べると増加の傾向にあるようだが，未だ成人に期待されるほどのM反応は産出されなかった。

8）外的統制（FC：CF+C）

外界からの情緒的な刺激に対する統制について，FCとCF+Cとの比率から検討する。FC>CF+Cの被検者は38名，FC=CF+Cの被検者は14名，CF+C>FCの被検者は13名であった。小沢によると，発達的には年齢と共にFCが上昇し，CFは3～4歳頃から減少するものの一旦思春期に増加した後に減少，またCは年齢と共に減少すると考えられている。先行研究を見ると，辻ら（1958）は学童期からFC優位になると述べており，小沢（1970）の資料もそれを支持している。本研究の高校生はほとんどがFC優位であり，思春期に増加するとされるCFも，高校生の段階ではまた減少し，落ち着きを取り戻すものと思われる。中でもΣC=0の被検者は4人であるが，CF+C=0の被検者が25名と多く，高橋ら（1981）の資料では日本の正常成人がFC≒CFという比率であることを併せて考えると，本研究の高校生では，やや統制が強かったり自由な情緒表現が抑制されていたりする傾向があるかもしれない。

9）動物反応

成人のA%は，池田（1995）によると25～45%程度，高橋（1981）によると31～55%で平均が42.7%（SD：11.9），片口（1987）の資料ではやや範囲が広く25～60%とされている。発達的には，小沢（1970）によると，A%は思春期頃まで年齢の増加と一義的な関係を持たないように思われるとされているが，子どもの示す平均値は成人の平均値の上限に近い数値，すなわち50%程度を示しているようであった。このことから，成人に近づくにつれ動物以外の反応が増えることにより，子どもに比べて成人のA%が低くなることを示している。松本（2003）によると，現代の子どもは過去よりもA%が増加しており，小学校の中学年から緩やかに減少はしているものの，中学生の段階で53.73%と高い数値である。これについて，松本は現代の子どもの社会的体験の乏しさや興味関心の幅の狭さによる影響と考察している。本研究の平均値は，52.52%（SD：14.97）と松本の中学生の値とほぼ並ぶ値で，成人に期待される値よりは高い。松本の言う社会的体験の乏しさや関心の狭さ，観念内容の乏しさや想像力や独創性の貧しさは，高校生の年代にも言えることかもしれない。

10）人間反応

人間反応は人への関心と感受性，社会的成熟性を表しているとされている。諸家によりH%は年齢と共に増加すると言われており，松本（2003）の資料では，中学生の76.7%が全体人間反応を産出するに至っている。高校生では65名の被検者の内55名（84.6%）が全体人間反応を産出している。成人の人間反応は，池田（1995）によるとR=25につき3～4個が適切であるとされており，また高橋（1981）の資料では，非人間反応も含めたΣH%が16～31%（平均23.6%，SD：11.1）と示されている。本研究の平均値は，非人間反応も含めた人間反応が21.11%（SD：11.45）と，成人の平均程度を示している。この値だけを見ると高校生において必ずしも人間を見る割合が低いとはいえないが，Ⅲカードにおける P反応の人が他の研究者による成人の平均値に比べ出現率が低いことが特徴として挙げられた。この人間反応は，池田（1995）の資料では64.7%，高橋ら（1981）では89.5%とかなり見やすいブロットであると思われるが，本研究の被検者では自由反応段階から人間を産出したのは34人（52.3%）のみと出現率が低かった。その他に全体像では見えないが「人間の上半身」という反応を出した被検者が7名で，この4名を含め限界検査における確認で「言われてみれば」「見ようとすれば」見える，という被検者が13名であった。「口がとがっているから人間じゃないと思った」「足は人間とは思えない」などと細部にこだわるために人間には見えないという被検者の他に，限界検査に於いても「全く見えない」と答える被検者もあった。

2．感情カテゴリー

感情カテゴリーにおいて特徴的な点は，何の感情も付与されない中性的な反応の割合（表中：Neutral%，以下N%）が高いことである。高校生におけるN%の平均値は51.02%であり，この値は池田（1995）の示す40%前

後という目安に比べ高い。村上ら（1958）はその感情カテゴリーの研究の中で，対人関係の場での緊張不安を抱く群に於いて，中性感情の割合が高く，ロールシャッハという対人関係の場を通して反映する萎縮的な態度のあらわれであることを述べている。高いＮ％は高いＡ％やＦ％と関係し，厳格で常同的な防衛が働いていると考えられ，高校生のロールシャッハ場面における硬く抑制された状態を表していると思われる。そのほかのカテゴリーにおいては大きな偏りはなく，下位カテゴリーにおいても顕著な特徴は見出されなかった。

３．思考・言語カテゴリー

思考・言語カテゴリーについて検討する。高校生65名に見られた思考言語カテゴリーの項目，それぞれの出現人数，個数を Table 2 に示す。寺崎・高橋（2002）では一般大学生において多くの思考言語カテゴリーがスコアされたことを述べたが，高校生の特徴としては全体的に思考言語カテゴリーにスコアされる言辞が少なかった。しかしその中で20名以上にスコアされたのは，DEFENSIVE ATTITUDE（防衛的態度）における question for instruction（テストの教示に対する質問），apology（self critic, object critic）（弁明的言辞に伴われての反応），FABULIZATION RESPONSE（反応内容の種類・性質・感情的調子などを限定付け，作話機能）における definiteness（特殊な限定付け），PERSONAL EXPERIENCE（個人的体験の合理化や自己関係づけ）における personal experience（個人的体験の表出），utilization for illustration（「～ようなと例示し，反応を明確化」）の６カテゴリーであった。星野ら（1995）は，大学生に頻出した definiteness, utilization for illustration, apology の３カテゴリーを「外界の関心に基づく適度な反応の明細化」として位置づけた。高校生被検者に多く見られたスコアもこれと一致し，高校生がブロットから離れない程度に肉付けするような明細化を行い，検査者に伝わるような例示を用いながら説明するといった適応的な側面を表していると思われる。森田ら（2001）は，思考・言語カテゴリーにおいて，「＜認知・思考＞＜感情統合＞＜コミュニケーション＞が適切に機能しているスコア」として Communicative Elaboration を設定し，健康さを反映する指標になりうるとしていることを述べた。本研究の一般高校生に多く認められたスコアも，寺崎・高橋（2002）の大学生と比較すると poor で抑制的ではあるものの，高校生の communicative な側面という健康さを示していると言うことができると思われる。その他のスコアに注目すると，CONSTRICTIVE ATTITUDE（反応産出に際しての困難さ）における card description（図版の描写：10名）や symmetry remark（対象性への言及：14名），DEFENSIVE ATTITUDE における modified response（反

Table 2
高校生65名における思考言語カテゴリーの出現人数及び個数

		出現人数	出現個数
Constrictive Attitude	redection	5	6
	card impression	1	1
	color description	4	5
	card description	10	14
	symmetry remark	14	22
Abstraction & Card Impression	direct affective response	3	3
	impressionistic response	5	7
Defensive Attitude	**question for instruction**	**32**	**39**
	additional response	3	5
	aplogy		
	ｉ）self critic	**25**	**39**
	ⅱ）object critic	**29**	**42**
	その他の apology	11	12
	modified response	17	24
	changed response	2	2
	secondary addition	3	4
obsessive and circumstanitial response	hesitation in decision	2	2
Fabulization Response	affective elaboration	9	12
	difiniteness	**23**	**126**
	affect ambivalency	1	1
	content-symbole combination	3	3
	overdifiniteness	16	26
	overelaboration	18	34
	over specification	2	2
Associative Debilitation & Labile Bewuβ-tseinslage	incapacity of explanation	4	5
	perplexity	1	1
	vagueness	2	2
	fluid	3	3
	forgotten	3	5
	indifferentiation of response	8	9
repetetion	repetition	4	5
Arbitrary Thinking	figure-background combination	2	2
	figure-background fusion	6	7
	projection of color	2	2
	arbitrary response	2	2
	arbitrary combination	3	3
	arbitrary linkage	11	14
	arbitrary belief	1	2
Autistic Thinking	contamination	4	4
	autistic logic	1	1
Personal Experience	**personal experience**	**22**	**59**
	utilization for illustration	**22**	**37**
	delusional belief	4	4

応の修飾の改変：17名），changed response（知覚・概念が変更された反応：17名），FABULIZATION RESPONSE における overdeiniteness（過剰な限定付け：16名），overelaboration（過剰な叙述：18名）が多く出現している。CONSTRICTIVE ATTITUDE や DEFENSIVE ATTITUDE にまつわる言辞が多かったことは，高校生被検者が検査状況の不安に対処し，慎重かつ防衛的な態度によって臨み，ブロットに向かうための構えを構築しているという意味で理解できるものである。また，頻出する場合にはその現実検討力についての吟味を必要とされる FABULIZATION RESPONSE においても，そればかりがスコアされる被検者はほとんど見られず，クリエイティブな遊びとしての反応と位置づけられるものが多かった。

高校生の反応において，量的分析の中で見出された形態水準の低さや M 反応の少なさといったネガティブなサインは，場面や状況を適切に把握する能力の低さや，情動が賦活されたときの統制の悪さ，内的な統合力の未熟さを示すものである。しかし，思考言語カテゴリーにおいてこのようなスコアの傾向が示されたことから，高校生のこころの世界が混乱し，逸脱し，歪んだ奇妙なものを内包しているというよりは，内外からの刺激に対処する十分な術を持たずに萎縮し，構え，困惑している様相が浮かびあがる。

4．まとめ

これらの結果より，本研究の高校生において，以下の4点が明らかになった。

1）情緒刺激に対する反応の良好さ

反応時間，F%，ⅧⅨⅩ/R%やΣC, FC : CF＋C において，成人の指標に近い値が得られた。このことから高校生では，ブロットの持つ多面的な性質を統合する力を持っていること，環境からの情緒刺激に対する適度な反応性を有していることが推測される。また，先行研究の中学生において低い値を示していたとされる H%においても成人の平均に近い値を示されたことからは，高校生の多くが人への関心や感受性，人を全体像として捉える能力が発達してきていると考えられた。

2）内的統制および言語表出の未熟さ

M 反応，形態水準において，成人の平均値に比べ低い値が示された。高校生では先行研究の中学生に比べ M 反応を産出する割合が増えているが，創造的な体験の蓄積や空想力，内的な安定性といった，成熟した適応に必要な自己統制に結びつく力という面で未熟である。また，形態水準の低さは，修飾過多になることによって現実検討が低下する大学生とは逆に，本研究では説明が足りないことが形態水準の低下の主な理由となっているものが多い。一部の被検者においては overelaboration がスコアされるが，多くの被検者では，ブロットの説明の際に必要最低限もしくはやや不十分な説明しか施されていない。

3）反応の rigid な傾向と抑制傾向

反応数が少ないことや感情カテゴリーにおける N%が高いことから，本研究の高校生では全体的に反応の産出や，自己の内面を豊かにブロットに投影することに対して抑制的である傾向が認められた。また，これは A%が比較的高いことからも言え，常同的な反応産出の傾向があることがうかがわれた。

4）DEFENSIVE ATTITUDE, Communicative Elaboration

青年期の被検者の中でも，寺崎・高橋（2002）の大学生と比較すると思考言語カテゴリーにスコアされる言辞が少なかった。しかしその中では防衛的な言辞，また communicative な言辞が認められた被検者が多い。高校生被検者の防衛的な在り方は青年期らしい特徴ということができ，また控えめな表出ではあるものの，検査者を意識して自分の見えたものや内界を相手によりよくわかってもらうためによりよく伝えようという態度がみられたことは，高校生の健康な側面を反映していると思われる。

Ⅳ．総合考察

本研究では一般高校生のロールシャッハ反応の特徴について，先行研究における成人や児童の非臨床群との比較を通して，量的分析を中心に検討した。その結果，以下2点の示唆が得られた。第1点目は，高校生においてほぼ成人の平均値に近い値を示す指標もあれば，未だ成人に求められるだけの反応を産出できない未熟なところもあるということである。特に高校生では良質の M 反応が少なく，また人間の全体反応が産出できないという意味で対象表象が未熟な被検者もいた。臨床場面でのアセスメントにおいて，M 反応は内的な生活を表すとされ，通常知能や想像力などの他に，自己概念や内的な安定性，共感性などといった，ひとの適応を助ける重要な能力のサインとされる非常に大切な指標である。通常 M 反応が1つしかみられなかったり全くなかったりする場合は問題であるとされ，心理療法を受けた前後のロールシャッハ反応に関する研究の中で，ほかの因子に比べ M 反応はもっとも変化しにくいといわれている。しかしながら，発達の過渡期にある高校生の年代では，非臨床群においても M 反応の産出には十分な変化の可能性が見込まれることが示唆された。

第2点目は，高校生の反応の仕方の特徴として，抑制的であり情緒的な表出が少なく，余計なことは言わずに無難な反応にとどめる傾向があるという点である。これは，ブロットの刺激要因に対して決して鈍感ではないにもかかわらず，さまざまな形で表出が抑制されているこ

とからいえる。この背景には，以下の２点が考えられる。一つには，松本（2003）が現代の日本人児童の傾向として述べている「表出することを避け，情緒的刺激は回避する傾向にあり，対人関係においても消極的であるが，全体としてはまとまり安定している」特徴が，本研究の高校生にも当てはまる可能性があるということである。これは現代の日本の児童～青年期に共通する特徴を表す一側面であるのかもしれない。もう一つは，M反応を産出できないことや，言葉にする能力の拙さに代表されるように，この年代では内的な統制が未熟であり，自分の中に起こった情緒を言語化し，その気持ちとかかわりながら表出することがあまりできないということである。そのため，抑制するというやり方は青年期の自分のコントロールの難しさに対する精一杯の対処であるのかもしれない。

ただし，本研究の被検者の多くは自発的に調査に協力を申し出た高校生であるため，自分について関心のある被検者であることが，結果にあらわれた統制の未熟さや情緒表出の少ない傾向に与えたバイアスについて考慮する必要がある。

以上のことより，一般高校生のロールシャッハ反応について検討することで，成人とは異なる高校生の傾向が浮き彫りになり，解釈の際に考慮する必要性が示唆された。

引用文献

Ames. L. ., Metraux, R. W. & Walker, R. N. (1971). Adlescent Rorschach response－developmental trends from ten to sixteen years. New York : Brunner/Mazel.

D.W.Winnicott (1965). Modern Psychoanalysis Series Ⅱ-2（牛島定信訳 (1977). 情緒発達の精神分析理 論 岩崎学術出版）

星野和実 ほか (1995). 名大式ロールシャッハ法における思考・言語カテゴリーの検討(Ⅲ)―大学生を対象として― 心理臨床学会大会発表論文集，374-375.

池田豊應 編 (1995). 臨床投映法入門 ナカニシヤ出版

J.E. エクスナー著 高橋雅春 高橋依子 田中不二男 監訳 (1991). 現代ロールシャッハテスト体系(上) 金剛出版

梶原隆光 菅原 憲 (1985). 高校生のロールシャッハ反応について 盛岡大学紀要，5, 15-25.

梶原隆光 ほか (1991). 高校生のロールシャッハ 奥羽大学文学部紀要，3，189-207.

片口安史 (1987). 改訂 新・心理診断法 金子書房

松本真理子 (2003). 子どものロールシャッハ法に関する研究 風間書房

森田美弥子 ほか (2001). ロールシャッハ反応における限定づけ・修飾の系列化 名大式「思考・言語カテゴリー」による検討 心理臨床学研究，19(3)，311-317.

長尾 博 (1989). 青年期の自我発達上の危機尺度作成の試み 教育心理学研究，37，71-77.

長尾 博 (1999). 青年期の自我発達上の危機状態に影響を及ぼす要因 教育心理学研究，47，141-149.

名古屋ロールシャッハ研究会 (1999). ロールシャッハ法解説―名古屋大学式技法―1999年改訂版

小沢牧子 (1970). 子どものロールシャッハ反応 日本文化科学社

Rorschach, H (1921). Psychodiagnistik. Ernst Blrcher（片口安史訳 (1976) 精神診断学 金子書房）

斉藤誠一編 (1996). 人間関係の発達心理学４ 青年期の人間関係 培風館

鈴木康平 松田 惺 (1997). 現代青年心理学［新版］有斐閣ブックス

高橋雅春 北村依子 共著 (1981). ロールシャッハ診断法Ⅰ サイエンス社

寺崎文香 高橋靖恵 (2002). 青年期の自己信頼感と防衛に関する研究 ―ロールシャッハ法による接近― ロールシャッハ法研究，7，37-50.

寺崎文香 (2004). 高校生のロールシャッハ反応に関する研究―防衛と適応という視点から― 日本ロールシャッハ学会第８回大会 大会論文集，40-41.

辻 悟 (1958). 児童の反応. 本明寛，外林大作編 心理診断法双書―ロールシャッハ・テストⅠ― 中山書店 p.271-348.

植元行男 (1974). ロールシャッハ・テストを媒介として，思考，言語表現，反応態度をとらえる分析枠の考案とその精神病理研究上の意義 ロールシャッハ研究，ⅩⅤ・ⅩⅥ，281-343.